

「病人のいやし（奇跡）」

2014年07月11日

マルコによる福音書1章29節～34節。「すぐに、一行は会堂を出て、シモンとアンデレの家に行った。ヤコブとヨハネも一緒であった。シモンのしゅうとめが熱を出して寝ていたので、人々は早速、彼女のことをイエスに話した。イエスがそばに行き、手を取って起こされると、熱は去り、彼女は一同をもてなした。夕方になって日が沈むと、人々は、病人や悪霊に取りつかれた者を皆、イエスのもとに連れて来た。町中の人々が、戸口に集まった。イエスは、いろいろな病気にかかっている大勢の人たちをいやし、また、多くの悪霊を追い出して、悪霊にもの言うことをお許しにならなかった。悪霊はイエスを知っていたからである。」

シモン（ペトロ）のしゅうとめは熱を出していたが、主イエスが手を取って起こすと、熱は去った。いやされたしゅうとめは、主イエスと弟子たちをもてなした。主イエスの宣教団には多くの女性たちが奉仕していた。しゅうとめは、その最初の女性ではないか。夕方になり日が沈むと、病人や悪霊に取りつかれた者が担ぎ込まれ、主イエスは大勢の病人をいやし、多くの悪霊を追い出したと伝えている。

福音書には、病気のいやしや悪霊追放の奇跡が多く書かれている。これらを行った主イエスは民間療法者だったという説がある。ペトロのしゅうとめの場合は、そのような見方もできようが、諸々のいやしは、それをはるかに超えている。奇跡物語を読むと、あり得ないと戸惑う。私もはじめて読んだ時、主イエスの愛には感動したが、奇跡を理解できなかった。そして、主イエスが捕えられると、弟子たちは逃げ去り、ペトロは三回も「知らない」と主イエスとの関係を拒否した状況を見て、奇跡は文字通りの事実ではないと思った。もし、弟子たちが福音書に記されている奇跡を目の前で見たのなら、裏切り、否認するようなことは決してしないと思ったからである。主イエスの奇跡には何事かがあったことは確かであろう。しかし、書かれたまを信じることはできないし、その必要はない。

福音書の記者たちは、主イエスの生涯と十字架の死と復活から「福音」を知らされ、奇跡物語を通して主イエスは何を示し、誰であるかを表そうとしたのである。

病気は、仏教でも「四苦」の中の一つとされているように苦しく、悲しいものである。それがいやされることは無上の喜びである。主イエスは苦しみ悲しむ者と向き合われた。当時は更に、病気は罪がもたらした罰であると考えられ、イスラエル人の共同体から排除された。好んで病気になる者はない。病気は神からの裁きであると言われ、村八分にされる。律法による「浄、不浄」の価値観が生み出した悲劇であった。こんな辛いことはない。主イエスは彼らをいやし、人間が人間として生きる権利を回復する喜びを与えられた。

記者たちは、苦しみ、疎外された病人と向き合い、彼らをいやし、生存を神の名において保証することを示されたナザレのイエスこそキリスト（救い主）であると信じ、奇跡物語を通して告白したのである。彼らの告白を信仰をもって受け入れると、奇跡は遠い昔の奇妙な物語ではなく、現実の生活の中で、書かれている奇跡と同じ出来事を体験していることを知らされる。病気がいやされ、悪霊から解放された人々と自分をぴったり重ね合わせることができる。奇跡物語は、私たち自身が主イエスにいやされ、神に是認されているという喜びのメッセージを込めているのである。